
風のグラスゴー 風雲編

玲於奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風のグラスゴー 風雲編

【Nコード】

N9382Z

【作者名】

玲於奈

【あらすじ】

この小説は、前作「風のグラスゴー」の続編です。いよいよ大学生活の大海原を漕ぎ出した主人公が、外国留学に向けてもがき、そして日本を旅立ちます。先が長い話ともなりますが、どうか日々こ愛読いただき応援よろしくお願い致します。

第一話 新聞広告（前書き）

前作「風のグラスゴー」は、著者の処女作でもあり、日々の自転車操業での物語で、読みづらいところなどありご迷惑をおかけしました。

しかしながらその日々の執筆の中で書きながら学んだこと、周りの皆さまから教えていただいたことがたくさんあります。主にパソコン操作面での様々な情報提供ありがとうございました。この新しい風雲編から、いよいよ外国に向けて始動します。先が長いことが予想もされますが、ご愛読どうかよろしくお願い致します。

第一話 新聞広告

何か新しいことをする時に
絶対反対する

あなたは違いますか？

一歩一歩 努力する人を
神様はぜっ たいに見捨てません。

自分を信じて一歩を踏みだそう。

太い白いゴシック

その後ろに細面の美女が笑っている。

前に座るサラリーマンが開く新聞の
一面広告。

それがなんだか痛烈に
自分を批判している。

そんな氣を感じる。

サラリーマン、全く動かない
どこか他の記事を読んでいるのだろう。

見た文字がフラッシュバックする。
文字が頭をまわる。

誰が訴えているのか？

頭を振って自問する。

今日は行けるのか？

やはり陸路でなければだめか？

科学の進歩も経済活動には勝てない。

訃報の連絡があって駆けつけた羽田

ゴールデンウィークのまっただ中

5月2日、日曜日。

混まないわけがない。

第一話 新聞広告（後書き）

皆さまのおかげをもちまして、新しい風雲編をスタートできたこと
ありがたく思います。前作「風のグラスゴー」は何度も挫折し、く
じけそうになりました。しかしながら、ここまでこれたこと本当に
ほっとしております。

ご縁ありまして年の終わりに、そして新しい年に向けて、新編をス
タートできたこと幸せに思います。最後になりますが、勝手ながら
もしよろしければ前作「風のグラスゴー」も読んで頂けますと風雲
編の助けになるのではと自負しております。よろしくご愛読くださ
い。

福沢諭吉 5枚（前書き）

なし

福沢諭吉 5枚

私は大学で新しくできた友人たちと遊んでいた。

場所は、幕張。人はそこを夢の国とよぶ。私たちは、人混みをものともせず

アトラクションに参加し、乗り物に乗った。

訃報が入ったのは午後2時。母からであった。

沈黙、いや静寂があたりを包み

その後、すさまじい突風が私を襲った一瞬、何も考えることはできなかったまわりの色を失った

世界がモノクロになる。そう聞く。

まさにそうであった。

そして、始終ゴーという音が周りを突き抜けていつていた。

私の青ざめた顔に友人歴2ヶ月（合宿での共同生活歴4日）の深谷博がすぐに反応。

事情を聞いて、すぐ5万円を貸してくれた。金、持つてる奴だと思っていたが、

「純、こづかいは必要な時に、必要なだけ、だから氣にするな。」

言い方がキザなのか、生まれつきなのか
わからない。

「シラツと言うな。シラツと。じゃあな。」

私は、博を軽くパンチしてやるが、悪意はない。
パンチは空を切る。

それこそ感謝である。
少し自分を取り戻せた。

すぐに人混みに走り出す。
200m行っただくらいで振り返る、
そして、片手で博を拝む。

残された3人は
何事もなかったかのように
すぐに人混みに消えた。

福沢諭吉 5枚（後書き）

なし

羽田空港 チケットカウンター（前書き）

なし

羽田空港 チケットカウンター

羽田に向かう電車の中で
なんで、どうして？

？が回り出してとまらない。

死因は何だったんだろう。

あんな健康そうなおじさんが・・・

しかしながら

それは電話で聞くのは憚られ

おじ 吉岡 健 38歳

東京の国立大を卒業後、

大手玩具メーカー入社。

その後、飛躍的に伸びるデジタル部門に

配属。そして期待に応え、ヒットを飛ばす。

5年前に退職。

札幌市で友人とコンピューター会社を始める。

最近、やっと軌道にのり。

これからという時であった。

「純、大丈夫。

通夜は明日。お葬式はあさつて。

私たちは、羽田から行かないで、

F空港の最終便で行くからね。

あんたも後で必ず来なさいね。」

母の声がふりそそぐ。

ついさっきのことのように、
リフレインされる。

神様は憎いことをする。

人がこれからという時に
試すように試練を用意する。

おじさん

無念だったんじゃないだろうか。

思わず泣きそうになり、
電車の床を見る。

空港に着くと

予想通りたくさんの人で
ごった返していた。

泳ぎながらチケットカウンターに
表示板も満席だらけだが
重ねて札幌行きを丁重にたずねる。
すばやくグランドホステス

目で笑って

口もとに笑みを浮かべる

羽田空港 チケットカウンター（後書き）

なし

無情の判決（前書き）

なし

無情の判決

「お調べします。」

グランドホステスは
すばやく端末を操り、

「本日はすでに満席で、よろしければ
キャンセル待ちいたしましょうか？」

黙ってうなづく。

「お手続きしますが、ALAのカードは
お持ちでないですか？」

言われて財布を引つ張り出す。

母が勝手につくった銀のカードが飛び出す。
翼が描かれているカードをスキャン。

「吉岡 純さまですね。」

「大変申し訳ありませんが、今日の
混み具合ですと、もしやキャンセル待ち
いただいてもご搭乗できない場合がありますが
いかがなさいますか？」

「待ちます。」

なぜかそう言えなかった。

もごもごと

「どうしても札幌に行きたいのですが
いつなら乗れますか。」

必死の想いで聞く。

これはあくまでも私の経験じょうですがと、前置きされ、朝一番の便は、キャンセルがままあり、ご搭乗できるかもしれません。とのこと。

どうしていいかわからなかった。

グランドの方は、カチャカチャ端末を検索。その間もわからなかった。

どうやらNALも調べてくれたらしい。

「札幌行きはどの航空会社も満席です。」

無情の判決であった。

無情の判決（後書き）

なし

運命の時（前書き）

なし

運命の時

明日早朝の便に賭けることにした。
テキパキと手続きをとる空港職員を
背中に

私は空港がグレーに変わっていくのを
ぼんやりと見ていた。

あとで、聞けば
東京のほかのおじは、
新幹線で盛岡まで行き、
そこから、夜行寝台に
飛び乗ったらしい。

自分には機転がなかった。

私は一人空港を後にし、
家に戻った。

何度か電話をかけようと
思ったができなかった。

死に直面するのがこわかったのかも
しれない。

あるいは、逃げていたのかもしれない。
一睡もできなかった。

ピンポンパンポン。

「札幌行き601便　ご搭乗手続きの
お済み方は、至急検査場までお進みください。
繰り返します。」

札幌行き601便　ご搭乗手続きの
お済み方は、至急検査場までお進みください。」

今、目の前には
一歩一歩努力する人は
神様はぜっ たいに見捨てません。

その強い文字が、
ここで乗れなければ

祈るような気持ちで呼び出しを待つ。

「札幌行き601便
キャンセルをお待ちの吉岡様。
至急チケットカウンターまでお越しください。」

ついにやった。
神様は見捨てなかった。
そう思った。

運命の時（後書き）

なし

デザイン部門にクレーム（前書き）

なし

デザイン部門にクレーム

搭乗待合室は

大勢の人だった。

驚くのはゴールデンウィーク

真っ最中というのに

ビジネスマンの

多いこと、多いこと。

7割 スーツ組。

3割 観光組。

搭乗前に並んでいる人も
いる。

時間との闘い。

タイムイズマネー。

さすがに

戦う日本の戦士達。

特撮スーパーヒーローと

たぶらせ、苦笑い。

列に並ぶために

席を立ったビジネスマンの

やっと空いた一席に座る。

後ろから

若手サラリーマン2人

ぼやいている。

テレビ会議でいいんじゃない。

うちら行く意味ってあんの。

かなり高飛車。

同僚も同意し、うちらが行く必要はない、ぶつぶつ・・・

社章は見えないが。

うちの会社の。。。デザインが悪すぎ。

うとのデザイン部門にクレーム

殺到は必死。

それで製品が動かないんじゃないやぶつぶつ。相当たまっているようだ。

かたやその向こうでは、

おばあちゃんがせんべいの

おかきを食べている。

みかんを食べている。

おいおい。

平和だ。流れる時間が違う。

デザイン部門にクレーム（後書き）

なし

柳沢慎吾（前書き）

なし

柳沢慎吾

私は、できるだけ周りのことを見て
自分が鬱にならないように、
ならないように暗示をかける。

斜め脇の人は、葬儀社の香典返しの
紙バッグ。

口数も少なく。頭が下がっていることが
多い。

目を遠くに移す。

遠くの廊下を

薄化粧の背が高いアテンダント

小走りでやってくる

A3幅の黄色いバックを持っている

そしてすぐに

機内と連絡を取る。

掃除の終了を確認しているのだろう。

それにしても

黒い四角のトランシーバーで連絡。

ああ、こんな時なのに

柳沢慎吾のタバコの

警察無線を思い出す。

誰も何も思わないのか!!!

「まもなくA L A 6 0 1 便札幌行き

ご搭乗を開始致します・・・」

思い出さない、思い出さない

つぶやきながら

別なこと、別なこと。

見るように、観察するように
列に並ぶ。

少しでも頭が

脳が死をイメージしないように。

やぶれかぶれでスタンドで

ビールを飲もうかと思ったが

朝6時のビールもどうかかと思いとどまる。

柳沢慎吾（後書き）

なし

桑田佳祐の寂しげな曲（前書き）

なし

桑田佳祐の寂しげな曲

機内に入る

通路は渋滞している。

遙か先では優先登場の家族連れが
席にはいるために苦戦している。

席につくとすぐ

スチュワーデスが座席ベルトの確認
手荷物入れの安全確認をしている。

自然な無駄のない動き。

彼女らも定時出発を目指し、
時間との闘い。

続けて脱出説明。

そついう私に余裕はない。

本当に飛べるのか。

大丈夫なのか???

ごごこんという音がして

エンジンが回転

牽引していた背の低い

ひらべったいトラックが離れるのが

窓から見てわかる

離陸が怖くなつて

ヘッドホンをする

桑田佳祐がさびしげな曲を
歌っている

窓の外では

整備員が頭をさげ

手を振る

もう帰ってこれないのか

笑顔が氣になる

グッドラックのサイン

木村拓哉か!!!!!!

桑田佳祐の寂しげな曲（後書き）

なし

ポケモンジェット（前書き）

なし

ポケモンジェット

そうこうしているうちに
右に左にまがって
滑走路へ向かうようだ
ターミナルにはたくさんの
飛行機が駐機している
ポケモンジェットもある
太陽光が窓を
いったりきたりする

車輪で走っているのか
はやい
飛び跳ねるように
走行している
しばらくすると
とうとうはじまで
来てしまった
紫に赤の照明灯が
滑走路ぞいに
無言である

ポーン
無機質な音が鳴る
「当機はまもなく離陸します・・・」
やわらかい女性の声だが
心臓の鼓動は
はやくなる

飛ぶのかと思う間もなく

すごいGがかかる

はやい

ゆれる

飛び立つ

ふわっとした感じ

旋回

どんどん上昇する

窓から東京の街が見える

海が見える

旋回して海へ

ポケモンジェット（後書き）

なし

夏の1日(前書き)

なし

夏の1日

飛行場が小さい

あんなに長かった

滑走路。

遙かに、見える。

そして、

突然に

白い雲に突入。

無音

ミンミンミン。

静寂。

飛び立つ

家の庭

門脇の木に

いたのだろう

小学生が

騒いでいる

「明日、おじさん来るんでしょう」

「何時頃くるのかなあ」

「さあさあ、何時になるでしょうねえ」

アイロンをかけながら

若い母親が

応えている

「ねえ、おじさん

何か買ってきてくれるかなあ」

男の子が

母親の背中に
もたれながら、

母と息子の会話が

蝉のこえの中

続いている。

視点が変わる。

8月の

強烈な熱線。

そして

雄大な山裾

パラグライダーに

乗っているかのよう。

鳥の視線。

夏の1日(後書き)

なし

赤のコンバーチブル（前書き）

なし

赤のコンバーチブル

その山を縫うようにして
走る道路。

赤いコンバーチブル、
ものすごいスピードで
疾走。

駐車スペースのある
ゆったりした展望台に
入って止まる。

車から先ほどの小学生
そして

もう一人

背の高い

神経質気味な

眼鏡の男が

スラッと降り立つ。

「おじさん、この車
速ええええ。」

スピードに酔って
興奮している。

「なんの、なんの」
外見とはまったく違う。
愛想のよい話し方。

背伸びをしながら

「いやあ、空気がうまい。」

東京とは違う。」

明るい声だ、

「おい、純。」

見てみるよ。

湖。でかいぜ。」

男は、聞いているのか

聞いていないのか

かまわずに話している。

赤のコンバーチブル（後書き）

なし

先のみえない世界（前書き）

なし

先のみえない世界

見渡せば

山裾

その下に

広がる田んぼ。

その彼方には

湖が

山々に囲まれ光っている。

男の子は

景色でなく

真つ赤な車を見つめ

「すごーい。

おじさん、

オープンカーも

できるんだあ。」

幌を見つける。

「ああ、できるとも。」

「すごいなあ。」

感嘆。

はっとした

目が覚める。

夢。

背中が冷たい

窓から

青い空

濃い青。

宇宙。

空がどこまでも

続いている。

ここは

どこ？

どこにいるのか

わからない。

そうか、

雲上。

もしや天国。

・・・

案外、

こういうところか。

行ったことのない世界。

先のみえない世界。

先のみえない世界（後書き）

ここで、本年の掲載を終わります。
良いお年を。

蜘蛛の糸（前書き）

なし

蜘蛛の糸

遙か彼方。

空と雲の境界線

薄い。

この世の果て。

じつと見つめる。

何かを感じた。

後方おばさんの
香水がきつい。

人間は匂いに
敏感。

それが

助けてくれたのか？

それとも、

別な誰かに

よばれたのか？

白雲が水のごとく
広がる。

池の波紋のように
ここに

石を投げたら
どうなるのか

蜘蛛の糸

芥川龍之介だ。

山の形が雲で表れる
まるで波。

またも

逃げるべく

音量を上げる、

シャカシャカシャカ。

ヘッドホンの

音楽が流れる。

曲は頭に入らない。

何ができるのか

どこに向かうのか。

どうするんだろう。

自問する。

どこからか

声がする。

どうする、どうする。

その声が

大きくなっていくような
錯覚。

蜘蛛の糸（後書き）

本年もどうぞ御贖に。。。

ホワイトアウト(前書き)

なし

ホワイトアウト

「飲み物は何にいたしますか？」

すごいタイミングで

声をかけられた。

顔が青ざめていたか。

茶を飲んで一息。

遠方に

何か見えてきた

もしかして

生まれて初めての

北海道???

ところが

何層もの

雲山

大きな雲へ

突入。

突如だーん

ゆれる

こわい。

実体のない白さ

窓から

上と下に

サンドイッチのように雲

その合間に
飛行機。

ゆれるゆれる
その雲間を
上がったり
下がったり

耳元で
小田和正
真っ白が
流れる。

着陸態勢。
止まったような
飛行機のスピード。

白雲に再度。
ゆれる
地面が近い。

そして
旋回する。

ホワイトアウト。

ホワイトアウト（後書き）

なし

逆噴射（前書き）

なし

逆噴射

着陸を再度待つ。

こわい

ゆれる。

旅立つのか、

おじさんに

呼ばれているのか？

祈る。

風で雲がとぶ

すごい早さ

負けずに

車輪の音。

着陸か？

ストップする感じのスピード。

つんのめる感じ

白霧が

どんどん

エンジンに吸い込まれる

滑走路はまだか

そこへ

見えた地面

下界に戻る。

雪がふきつける。

人の姿は無い。

広大な大地が

前方に

こんなに

地面が近かったのか

どどん

大地に近づいていく。

滑走路が見える。

車輪が着く。

逆噴射。

止まるか、止まるか。

このまま終わるか、

大丈夫か。

スピードが落ちない。

急激にスピード落ちる。

止まったあああ。

無音状態が

続く

逆噴射（後書き）

なし

手荷物受取所（前書き）

なし

手荷物受取所

白い四角い窓
ブロックのような建物
ターミナルだ。

生きて帰った。
帰還。

おじさん、
私はまだ
そちらには
いきません。

心の中で深く黙祷。

あわただしい
手荷物受取所。

「あんた、どこにおると？」
母は

驚いて声が上ずっていた。

そんなに驚くことか！
と思いつつ

平静を装い、

「今、着いた。」

「これから向かう。」

「札幌駅にきんしゃい。」

「駅からはタクシー、
北15西1ベル会館」
暗号のような地名を言う
忘れないように
北15西1。
つぶやく

手荷物受取所（後書き）

なし

束ねた万札（前書き）

なし

束ねた万札

音もなく電話が切れた。
JR改札まで走る。
映画のヒーローの様。
自分に酔う。

ふと

前を歩く

大柄な兄貴。

後ろのポケットから
何かがこぼれる。

半分に折られた
束ねた万札。

スローモーションのように
拾って

走り抜きざま

「落ちましたよ」

声にならない

「おお」

強面の方だった

振り返らず

走り去る。

後で考えれば
お礼をもらっても
よかったか。
それより
やんしゆうに
追いかけれなくて
よかった。
仁義をきられても
困る。

キオスクで
白い恋人
クラシックを
購入。

叔父さんに供えよう。

叔父が
憧れた北海道。

束ねた万札（後書き）

なし

若いねーちゃん(前書き)

なし

若いねーちゃん

列車に乗車。

ボックス席

前を観光か

女子大生二人

座る。

奥の入り口、

仲間が騒がしい。

眠っていた

気がつけば

新札幌。

降りるところか？

違った

前のねーちゃん

慌てて降りる

切符を落とす。

慌てて

声をかける。

拾ってやる。

よくまあ

誰かが

物を落とす日だ

ありえなさに、

なんかのどつきりか
撮られているのか
周りを

不用意に探る
勘ぐる。

空港から

札幌まで1時間ちょっと
天井の高い構内、
タクシーに乗る。

北15西1とつぶやく。

わかつているのか
いないのか
何も言わずに
タクシーが走り出す。

若いねーちゃん（後書き）

なし

ポプラ並木（前書き）

なし

ポプラ並木

東京と変わらない

立ち並ぶビル

それに拍子抜けする。

そうりゃそうだ、

まさか原野な

訳はない。

高架下にもぐる。

しばらく走って。

「あんちゃん、北大。」

見れば、右手に大学入り口
すつと流れる。

塀沿いに建物が続く。

びっくりして

乗り出すようにして
見る。

「北大は

ずっとむこうまで

続いているの。」

ずうつとに力が入っている。

おっちゃん

少しためて

「隣の駅までな」

「あんちゃん、競馬しないのか？」

何と答えていいか
黙っている

「ぜひ

行ってみな。

これから、

そりゃあいい季節だべ。
」

おじさんは、競馬の話を
したそうだったが
こちらは
黙っていた。

ポプラ並木（後書き）

なし

葬儀場（前書き）

なし

葬儀場

車は、右折。

左手の

真四角な箱のような
建物玄関に
横付け。

料金を払うと

「あんちゃん、
きつと

いいことあるよ。」

おっちゃんは
そう言つて
去つていった。

帰り際

ウインカーをあげながら
窓から手を出して
グッドラック。
しやれっ氣がある。

記憶にあるかぎり
葬儀場は

初めて。

自動ドアから
喪服女性が

走り出る。

親戚に

氣づかれないようにか
連れ込まれた

小部屋。

母から

語られた

叔父の死因。

宴席で倒れ。

そして亡くなる。

あの日、5月2日。

会社発足5周年の宴席が
行われた。

立派なホテルでも

なんでもなく、

会社近所の

食堂兼居酒屋

「お多福」。

葬儀場（後書き）

なし

乾杯の挨拶（前書き）

なし

乾杯の挨拶

お多福とは、
気取らない
叔父らしい。

5名しかいない
従業員も
残業時の行きつけの店。

かきいれ時の昼食時を
はずして
14時から夕方まで貸し切り
での氣さくな会。

若い従業員の
羨望の
ごちそうが並べられ、
乾杯の発声。
小氣味よく
グラスの音がぶつかる。

ゴールデンウィーク連日の
やつつけ仕事疲れも
交じってか。

叔父はスピーチをしながら
感極まったらしい。
「無名の我々がよく

ここまでこれた・・・」

社員全員の

力強い拍手、

しばらく

鳴りやまなかったそうだ。

ほっと安堵して

皆が料理に手を

つける中、

連日の徹夜もあつてか

叔父は強くもない

ビール

何杯かで

頭が痛いと言って

横になった。

乾杯の挨拶（後書き）

なし

叔父の最期（前書き）

なし

叔父の最期

座布団を枕に
目に付かないように
みんなを背にした。

いびきもなく、
静か。

小1時間たち、
ふと誰かが
見れば

咳こんだのか
嘔吐の形跡。

起こそうとする。

ところが

全く

反応が無い。

あわてて揺り動かすが
全然だめ。

泣きながら救急車。

救急隊員

冷静に

呼びかけるも

反応なし。

意識障害。

病院へ。

くも膜下出血。

脳血管の分岐部に

できたこぶが

破裂し

脳の広い範囲に出血。

叔父は

あっけなく

帰らぬ人となってしまうた。

通夜ぶるまいが

始まった。

親友が駆けつける。

故人の供養に。

母が丁寧に誘っていた。

叔父の最期（後書き）

なし

ワンピースの女性（前書き）

なし

ワンピースの女性

一人

髪をアップにまとめた
地味なワンピースな
妙齡の女性。

故人を

食い入るように見ている。
誰だろう。

叔父に

女氣はなかった。
なぜかは
わからないが、
ずっと一人を通してきた。

世話好きの叔母からの
再三のお見合い。
何度薦めても
固辞してきた。

なんとなく
買ったお菓子を
すすめてみた。
袋を開けて食べながら
ぼつりと

「健さん。」

がんばりすぎたわね。」

「少し楽になるって言ったのに」

居たたまれなかった。

なぜか涙があふれてきた。

黙って席を立って

落ち着くまで

外にいた。

札幌は、明るすぎて

星が見えなかった。

ワンピースの女性（後書き）

なし

管理ソフト（前書き）

なし

管理ソフト

通夜を閉める挨拶の後、
墓の話になった。

祖母高齢のため
長男が喪主。

私も知らなかったが
父の祖父がなくなつた際、
兄弟でお金を出し合い
実家に墓を作つたそうだ。

今は、長男が
墓を守っている。

ところが、
父の兄の長女が
突然。
叔父を墓に入れない。
言い始めた。

いつも自由な叔父だけに
いろいろあつたのだろう
後ろ暗い感じがして
その場を離れた。

墓でこうなので
叔父が立ち上げた
会社は

どうなるのだろう。

叔父は

会社を作るにあたり

業務用経理ソフト

OA機器を

一元化し操作できる
管理ソフト。

特に、管理ソフトは
画期的であった。

OAの一元化

それは

逆に言えば

情報の集約に伴う

弱さを

狙われるところも

危惧されたが

そこはそれ

セキュリティソフトを

さらに開発。

セットで販売し

弱点を補った。

そして、

同じく家庭用も開発し

それを収益の柱にと
考えた。

管理ソフト（後書き）

なし

就職氷河期（前書き）

なし

就職氷河期

さらに営業は

敏腕な

誰かに

お願いし

自分は

製作に集中

したいと

考えた。

とどのつまり

自分が営業・経理まで

するのは

無理だと

判断したのだろう。

折しも

就職氷河期。

企業入社組も

入社何年かで

嫌気がさし

辞める者を

引き抜こうと画策。

夢がある。

骨のある奴。

を探しに

出かけた。

というわけだそうだ。

はじめは

ことわられて

ことわられて

あきらめかかった

そうだ

しかし

夢を絶対あきらめない

そう

誓って

再度また

アタックを開始した

そうだ

しかしながら

おもしろいもので

いの一番に

誘い

ことわられた

大学時代の友人。

何度も何度も

話をするうちに

情にほだされたか

熱意に負けたか

はたまた騙されたか。

ついに

友人の

引き抜きに成功した

就職氷河期（後書き）

なし

サイバー犯罪（前書き）

なし

サイバー犯罪

その方は、
某大手化粧品会社に
就職していた。

なんとも

いつもながら

自分中心の

迷惑な叔父であるが

しかし

一方でにくめないところもあり

そこに皆が

ひかれて集まるのでは

ないかとも思う。

はじめの頃こそ

バグとり

おわれたり

他者の営業妨害も

あったが

時代が叔父に

味方した。

果てしない

インターネットの

普及。

それに伴う

サイバー犯罪の普及。

情報の多様化。

高速化による

情報管理。

その重要性が認知され

口コミで

契約がどんどん伸びた。

人が人を呼んでくれたのだ。

そして

企業や家庭の

危機管理の

強い意識化。

社の販売件数は

右肩あがりを記録した。

業績優秀な

会社の行く末は・・・

墓の話は

あいかわらず

続いている。

いつ終わるともわからない

不毛な論争を

片隅で聞きながら。

壁際に

毛布をかぶって

横になった。

サイバー犯罪（後書き）

なし

ジュニア(前書き)

なし

ジュニア

「ジュニア」

「ジュニア」

遠くで誰かが呼ぶ声が
聞こえる。

「十万二百円、この場で
お支払いいただきたい。」
黒づくめの男が言う。

すだれ髪。

さらに小太り。

加齢臭。

三重苦。

私の隣に
若い男。

こちらはござつぱり。
同じくスーツ姿。

その人がジュニアか。
隣をうかがう。

かさねてすだれが
「県議。」

いそいで支払いを」
「市長、町長連中が
お待ちです。」

隣、支払う。

「吉岡県議

あなたもです。」

語氣が鋭い。

何を言っているんだ。

面食らう。

「さあ、早く。早く。」

おされて

内ポケットに手を入れる

なんと

いつものように

財布がある

中を開ける。

驚いた。

福澤さんがぎつしり。

2、30枚はある。

何の商売をしているんだ。

悪い奴か。

11枚抜き取り

すだれに渡す。

「さあ、お待ちですから

行きますよ。」

怒ったようにせきたてられる。

宴会場。

大広間。

やたらと貫禄のある

海千山千の

輩がいるいる。

ジュニア（後書き）

なし

事務局和田（前書き）

なし

事務局和田

大広間で皆
何か食べている。

すだれが

「県議がお見えです。」
声をかける。

一同ゆつくりと

拍手する。

すだれに従っていくと
なんと上座。

恐縮する。

背後の床の間
掛け軸が重い。

二人分の席はあるが
なぜか

私の寿司はない。

一番近くの座長らしき人物。

「たわけ。」

閉じた扇子が投げられる。

ぼんやり立っている
すだれに当たって。

ははあああ。

すぐに土下座。

頭をこすりつけて
消え入るような声で

「確認して参ります。」
素早く立ち去る。

あまりの事に
呆然とする。

一同静寂。

だれもフォローしない。
何事もなかったかのように
皆、黙々と
寿司を食べている。

啞然とする。

失礼します。
正座してふすまが
開けられる。
年配の和服女性。

上座までやってきて
県議、大変失礼致しました。

きちんと手について
謝られる。

「今、手配しています。
私、事務局の和田です。
以後お見知りおきを。」

女将と思った。

先ほどの扇子飛ばしが

「いやあ失礼した。

奴も、もう長くないので
県議。

どうかお許しを」

微塵も悪いと

思っていないように言う。

事務局和田（後書き）

なし

守衛（前書き）

なし

守衛

んな氣配を察したのか。

突然。隣の男性。

「あの人が事務局を仕切っている方。かなりやり手の女性ですよ」

噂の和田氏の携帯が鳴る。

「お偉いさんお待ちです。
お二人行きますよ」

ここの人より偉い人って。
っていうかお寿司食べてません。
寿司も食べずに、有無を言わず。

和田氏、扇子の紳士に耳打ち。
「そりゃあしかたない。
行きなさい」

「まあ戻ってこれたら戻って来なさい」
おいおい片道切符か。

曲がりくねった廊下に行く。

守衛2人が立つ扉。

両開きに開かれる。

対面式。階段状の長いす。
かなり長いし。

部屋もテニスコート1面分はある。

中央に演台。

入ってすぐの上段に座らせられる。

「この点についてどう思われますか」

「その君。あなたはどうか考えですか」

弁士が私をいきなり指さす。

挑戦的。

その氣迫で思わず立ち上がるが答えられない。

「議長、同じ名字のよしみでお答えします」

見れば親父でないかい。

どうなってるんだ。

かるい目まいが・・・

後ろにひっくりかえっていく。

守衛（後書き）

なし

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9382z/>

風のグラスゴー 風雲編

2012年1月8日20時50分発行